

## 小児用肺炎球菌ワクチン

	<p>2010年2月から小児用肺炎球菌ワクチンが使えるようになり、当院では、1回 10000 円の自費接種でしたが、平成23年2月15日から松山市による補助が開始され、対象年齢の生後2ヶ月～5歳未満の方は無料で小児用肺炎球菌ワクチンが受けられるようになりました。(ただ、扱いはインフルエンザワクチンと同じ任意接種になります。)</p>
<p>肺炎球菌とは？</p>	<p>名前のお通り、肺炎の原因となる細菌ですが、小児の場合、肺炎のほかにも中耳炎、菌血症、細菌性髄膜炎を引き起こすことがあります。抗生剤で治療可能ですが、最近では抗生剤が効きにくい耐性菌が増えてきたため、ワクチンによる予防が注目されています。</p>
<p>小児の細菌性髄膜炎の原因は？</p>	<p>小児の細菌性髄膜炎の原因で最も多いのはヒブ菌で、日本では毎年600人ほどの子どもがヒブ菌による髄膜炎に罹っています。その次に多いのが肺炎球菌で、毎年200人ほどの子どもが肺炎球菌による髄膜炎にかかり、内1/3くらいが死亡したり重い障害が残ったりしています。このふたつの菌で細菌性髄膜炎の約80%を占めています。このワクチンはアメリカからの輸入品です。</p>
<p>肺炎球菌ワクチンって？</p>	<p>小児用肺炎球菌ワクチンはすでに世界100カ国近くで取り入れられ、2000年に発売されて以来、世界で何千万人も子どもに接種されています。2000年からこのワクチンを定期接種にしているアメリカでは、肺炎球菌による菌血症と髄膜炎を98%減らすことができたと報告しています。</p>
<p>ワクチンの副作用は？</p>	<p>注射した部位の発赤や腫れ痛みがみられることがあります。また、ワクチン接種後48時間以内に37度後半の微熱が20%の方にみられるといわれています。この他、まれにショックまたはアレルギー反応が認められることがあります。先頃、ヒブワクチン・小児用肺炎球菌ワクチンを含む同時接種後の死亡例が複数報告されたことをうけて、平成23年3月4日にヒブワクチン・小児用肺炎球菌ワクチンの一時接種の見合わせがありました。その後、厚生労働省の専門家会議で、安全性上の懸念はないとされ、平成23年4月1日から接種が再開されております。ただ、小児用肺炎球菌ワクチンに限らず、ワクチン接種後にワクチンとの因果関係の有無を問わず50万回～100万回接種に1回は死亡を含む重症な症状が出現する可能性があることをご了解下さい。</p>
<p>対象と接種方法は？</p>	<p>生後2ヶ月以上～7ヶ月未満. . . . . 27日以上の間隔をあけて3回接種(ただし3回目は1歳までに済ませる)その後、追加接種として3回目接種から60日以上の間隔をあけて標準12～15ヶ月齢に1回追加接種</p> <p>生後7ヶ月以上～12ヶ月未満. . . 27日以上の間隔をあけて2回接種、その後、追加接種として2回目接種後60日以上の間隔をあけて12ヶ月齢後1回追加接種</p> <p>1歳台. . . . . 1回目の接種後、60日以上の間隔をあけて1回追加接種</p> <p>2歳以上～9歳歳以下. . . . . 1回接種で終了</p>
<p>予約は必要性ですか？</p>	<p>小児用肺炎球菌の説明文を熟読され、内容をご理解された上で、接種ご希望の方は、当院では予約が必要ですので電話か当院受付でお申し込み下さい。</p>